

「ヘリコバクター・ピロリ フォーラム 病態と治療の最前線」

大分医科大学・第2内科 藤岡 利生 編集
東京都立駒込病院・内視鏡科 榎 信廣

順天堂大学医学部・消化器内科

佐 藤 信 紘

New South Wales 大学の A.Lee 教授の話では、1999 年 4 月に上海で開かれたヘリコバクター・ピロリ (HP) に関する国際ワークショップで、HP 専門家と称する 13 名に会の初めに“HP が胃癌の原因と考えられる十分な証拠があると思うか”とのアンケートをとったところ、5 名が No と答えたという。ところが 3 日間の討論を終え、会の終了時に再び同じ質問をしたところ、全員が Yes と答えたという。すなわち専門家といえども個別的には新たなデータや考えにはすぐに賛同できず、HP と胃癌の関わり合いはまだ明確でないと思っていたが、疫学データや科学的実験事実を十分吟味・評価すると考えが改まったというのである。当然ながら人類はこのようにして多くのことを学び進歩してきた。

このたび藤岡利生、榎信廣両博士の編集による表記の書物は、日本の誇る若手 HP 研究者による最新の HP 情報をまとめたものである。

一体 HP は胃にどのようにして感染・定着するのか、酸分泌機能や粘膜をどのようにして傷害するのか、HP 菌種によって違いはあるのか、免疫系がどのように関連するのか、など、今なお未解決の難しい問題が

先に記載されているが、ここは実地医家は必ずしも必読ではないと思う。

次に HP 感染動物モデルについての記載があるが、圧巻は HP 単独感染でも mongolian gerbil という動物では慢性胃炎、萎縮性胃炎、腸上皮化生を経て胃癌が生じるという論文である。新聞でも報じられたので多くの読者はご存じのことと思うが、寿命半ばで半数近くが胃癌を生じると筆者は英文誌で読んだ。しかもヒト胃癌と極めて類似した発生過程で発癌するのである。紙面の都合上であらうか、胃癌発生実験に関しては多くの紙面を費やしていないが、ここが読者の大いなる関心事と思う。

更に、HP 除菌治療についての項であるが、HP 診断法や種々な除菌療法レジメンについては、これまでの成書に詳しく書かれているのでここではあまり触れられていない。しかし、薬剤感受性の差異が生じる理由や、酸分泌能が除菌で回復するという論文は説得力があるし、萎縮や腸上皮化生までが除菌で改善する例があるというのも除菌の有効性を示す迫力あるデータと思われる。除菌で消化性潰瘍の再発が著しく減少するのは洋の東西を通じて同様で

あるが、ジスペプシア (NUD)、NSAIDs 胃炎などに対する除菌効果については、あるものはデータ不足であり、あるものは discrepancy があるとか、今日未解決な問題なのであろう。

除菌治療の圧巻は何と言っても胃癌再発の著しい低下であらう。上村らの論文によると早期胃癌の粘膜切除後に除菌をした群と非除菌群を最長 7 年間追跡し、非除菌群 67 名中 10 名に胃癌が再発したが除菌群では 65 名中 1 名のみに除菌 4 年目に胃癌が出現したにすぎないと言う。これを聞けば、胃癌患者は 1 日でも早く除菌をしてほしいと願うのが人情であらう。除菌によって胃癌の発生が防げるかどうかは現在進行中の介入試験の結論が出る 2010 年を待たねばならない、と最後に記載されているが、除菌治療が比較的簡単であり再感染が極めて少ない現状を考えると、本書を読んで 1 日でも早く国民の皆様に除菌の恩恵にあずかせてあげたいと思うのは筆者だけではないまい。

● B5 頁 208 図 105 写真 17
カラー写真 29 表 68 1999
定価 (本体 4,700 円 + 税) 円 400

—医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)